

私のおすすめ本

江上弘幸 助教
(経済データ分析)

『最高の仕事ができる幸せな職場』 ロン・フリードマン著 日経 BP 2015年

仕事を快適にできる環境についての科学的なエビデンスが集められた本です。著者の Ron Friedman は心理学者です。最近の経済学は、科学的なエビデンスを提供するという役割が強まっており、そうした点では心理学や公衆衛生、教育学など様々な分野と地続きになっています。最近流行している「行動経済学」という分野の始祖のひとりである、ノーベル経済学賞を受賞したダニエル・カーネマンは、心理学者です。みなさんも、経済学部に入ったからといって、「経済学」の名のついた本ばかりではなく、ぜひ様々な科学の分野の本を手にとってみてください。

この本の面白さは、目次からいくつか印象的な言葉を引用するだけでも、片鱗が伝わるとおもいます。「成功するチームはなぜ多くの失敗をするのか」「家で働くほうが生産性が高い理由」「孤独があなたをダメにする」「友人作りの科学」「強引なリーダーがチームを生産的にできない理由」「高額な報酬は逆効果」「過干渉の親とマイクロマネジメントの共通点」「職場で認められることは昇給よりも嬉しい」「多忙なマネージャーのためのアドバイス」「マネージャーの行動・感情が従業員を方向づける」「面接がうまくいかないのはなぜか」「面接官の心のうち」「就職面接でどうやって嘘をつくか」「面接で何を聞くか」などなど…。

これら論点について、最新の科学的なエビデンスを基に解説しているのが、この本です。みなさんにも身近なトピックはありませんか？もしかしたら、就職面接の話に関心があるかもしれません。世の中あやしいハウツー本であふれています。そういうものにふりまわされず、科学的なエビデンスを参考にしましょう。

もしかしたら、まだ働いていないみなさんはあまり関心がないかもしれません。でもきっと、働くようになったら自分の職場がどれほど自分を幸せにしているか（多くの人は疑問に思っただけ）という論点に、関心が高まると思います。そのとき思い出したら読んでみてください。

貧困問題や環境問題について、ありがちな誤解を解いて、データを基に世界を正しく見る習慣をみにつけるための本です。著者のハンス・ロスリングは公衆衛生学者で、「経済発展と農業と貧困と健康のつながり」が専門です。「え、それは経済学者の研究分野では？」と思ったひとはいますか？最近では、経済学以外の分野の研究者が、もともとは経済学者が主に研究していた問題に取り組んでいることが増えています。経済学用語に頼らずに説明がなされるので、読みやすいものが多いです。

みなさんは、「世界はどんどんよくなっている」「世界はどんどん悪くなっている」どちらだと思いますか？世界で極度の貧困にある人の割合は、過去 20 年でどうなったと思いますか？乳幼児の死亡率は？HIV の感染者は？大気汚染の状況は？災害による死者数は？これらの回答は、この本にあります。

科学やデータのサポートを受けていない誤解が、知らず知らずのうちにあなたにしみついていませんか？私の授業で、ある問題で「経済成長と格差の緩和は同時に達成できない」という文章を正しいと答えた学生がたくさんいたことに、私は大変驚きました（教科書のどこにもそんなことは書かれていなかったのに）。

学問的にはサポートされないような情報を信じ込まないためのリテラシーを、ぜひ大学生の間に身につけてください。そのためには様々な角度からたくさんの学びが必要になります。この本はその第一歩になるでしょう。

自己紹介文

江上 弘幸（えがみ ひろゆき）

みなさんは、経済学というと GDP とかマイナス金利といった言葉を連想するかもしれません。そういった「典型的な」経済学からは少し遠い実証研究が、私の専門です。そんな私が好きな本の一部を紹介しました。